松本仙挙と矢野橋村

五味俊晶

一．はじめに

コロナウイルスの影響もあり、昨年度に引き続き、愛媛県外での作品調査を行うのが難しい一年であった。そのようななか、現在の西予市出身の松本仙挙（一八八〇～一九三二）と現在の今治市出身の矢野橋村（一八九〇～一九六五）の作品をまとまってご寄託いただけたのは、特筆すべきことであろう。本稿では、それぞれのコレクションにどのような作品が含まれているか概要を示したうえで、特に矢野橋村が制作した晩年の連作について記してみたい。

二．松本仙挙コレクション

松本仙挙は明治十三年（一八八〇）東宇和郡野村町蔵良本村の庄屋、松本廣武の長男として生まれた（註1）。本名は政興。「政興」の白文方印を使用することが多いのは、そのためであろう。幼少期より絵を好み、家族の反対を押し切って京都市立美術工芸学校へ入学。明治三十五年（一九〇二）に同校を卒業後は山元春挙に師事し、師の一字をうけ仙挙と号した。ただ、仙挙は師である春挙の芳醇な色彩表現などを受け継ぐだけではなく、様々な絵師の画法も積極的に取り入れようと試みていたようだ。例えば《六歌仙図》（個人蔵）の落款には「倣始興図／仙挙寫」と記されており、その構図は渡辺始興《六歌仙図》（アーティゾン美術館蔵）などの影響を受けていたことがうかがえる。また大正十五年（一九二六）には、「山水花鳥ともに清趣に富んだものを描くが、近来は同塾（注：早苗塾）の文濤氏等と倶に南画方面に興味を見出して、寫實でたゝき上げた腕を南画畑に延ばせて、鮮かな技巧で奥行のある南画調のものを描き、黴が生えかゝつて型に嵌まつたやうな南画を見飽きたものに、之あるかな、之あるかなと感嘆させてゐる」と評され（註2）、南画にも積極的に取り組んでいることが分かる。

今回ご寄託いただいた作品は、【表1】の通り、軸装作品十五点、額装作品一点の計十六点。仙挙の長男である揖一郎に宛てられた感謝状が一点含まれているものの、それ以外は全て仙挙の作品である。なかでも大正六年（一九一七）の第十一回文部省美術展覧会（以下、文展）に入選した《静山》（図1）、大正十年（一九二一）の第三回帝国美術院展覧会（以下、帝展）入選作《静寂図》（図2）、そして大正十三年（一九二四）第五回帝展入選作《伍道の跡》（図3）の三点はその白眉であろう。

残念ながら《静寂図》の本紙には大きなシミが発生し、《伍道の跡》は額装作品ゆえに画面の縦折れが強いものの、仙挙の官展出品作が《鬼ヶ城山之図》（宇和島市立伊達博物館蔵）しか確認できていない現在、この作品群の発見は仙挙研究の新たな出発点となりうる。

また出品作ではないものの、仙挙の活動を支えていた皆川家のために制作された作品及び皆川家旧蔵品も五点（《秋》、《水蓮図》（図4）、《孔雀》（図5）、《武者》（図

6）、《桃》）本コレクションには含まれている。没後九十年が経過した現在でも、仙挙の画業については詳細な考察が行われていない。本作品群を中心としつつ、実作品に即した仙挙像を確立することが今後必要であろう（註3）。

三．矢野橋村コレクション

矢野橋村は明治二十三年（一八九〇）、愛媛県越智郡波止浜町に生まれた。本名は一智。明治四十年（一九〇七）に画家になることをめざして大阪へ行き、生計と学資を得るため大阪陸軍造兵廠において見習工として働き始める。しかしながら、その作業中に機械へ手を挟み、左手首を切断する事故に遭遇。以後、橋村は郷里からの援助を受けながらも画家への道に専念し、南画家・永松春洋（一八五〇～一九三一）のもとで研鑽をつむこととなる（註4）。

今回ご寄託いただいた作品は【表2】の通り、橋村旧蔵書籍などを含んだ七十二件の作品群。師である永松春洋の色紙（№70）やマクリの状態で保管されていた自らの習作などが大量に含まれている。この膨大なコレクションにおいて最も重要な作品は、昭和三年（一九二八）の第九回帝展において特選をうけた《暮色蒼々図》（図7）であろう。二四〇・〇×一五〇・〇cmという大幅であり、橋村のたどり着いた到達点とも言える作品である。その他にも第七回日本美術展覧会へ出品した《不動窟》（№5）や第一回日本美術展覧会に入選した《旅僧》の習作（№17）などが含まれている。「関展」への出品作と記されている《ハイキング（渓間）》（№15）は、彼の新しい作風の展開を物語っている。また彼が学んだと思われる様々な粉本も本コレクションには含まれており、橋村がどのような作品を実見していたか追いかけることができる。表装されていない作品が大半を占めてはいるものの、貴重な旧蔵コレクションといえよう（註5）。

四．橋村による『無関門』連作について

前述のとおり、今回ご寄託いただいたコレクションには橋村の手がけた作品がマクリの状態で大量におさめられている。今回はそのなかでも、彼が亡くなる直前に手がけていた六点について考えてみたい。

【作品一】（図8）

本作は紙本着色、内寸は七八・四×六〇・八cm。画面中央下には二匹の犬が描かれている。その周辺には、竹や岩が擦れた淡墨で示される。画面左下には「乙巳新春智道人／寫之」の款記が残る。このことから、昭和四十年（一九六五）の春に本作を手掛けていたことが分かる。画面右上から左にむかって記される賛文は以下の通りである。作品理解のために、原文と訓読文を掲載する。なお原文に関しては橋村の記した通りの字体を用い、訓読においては新字体へ適宜改めた。また原文の段落替えについては「／」で示し、橋村によって省かれている文章については括弧の内に入れつつ記載した（註6）。

【原文】

趙州狗子

趙州和尚因僧問狗子還有佛性也無州云無無門曰参禪／須透祖師関妙悟要窮心路絶祖關不透心路不絶盡是／依草附木精霊且道如何是祖師関只者一箇無字／乃宗門一関也遂目之曰／禪宗無門關透得過者／非但親見趙州便可／與歴代祖師把手共行眉毛／厮結同一眼見同一耳聞豈不／慶快莫有要透関底麽／將三百六十骨節八万四千毛／竅通身起箇疑團參箇／無字晝夜提撕莫作有（虚）無／會（莫作有無）如呑了箇熱鉄丸相似吐／又吐不出蕩盡從前悪知悪／覚久丶純熟自然内外打成一片如／啞子得夢只許自知驀然打發驚／天動地如奪得関將軍大刀入手逢佛殺／佛逢祖殺祖於生死岸頭得大自在向六／道四生中遊戯三昧且作麽生提撕盡平／生氣力挙箇無字若不間断好似法燭一點便著

頌曰

狗子佛性全提／正令纔涉有無／喪身失命

【訓読】

趙州の狗子

趙州和尚、因みに僧問う、「狗子に還って仏性有りや也た無しや」。州云く「無」。無門曰く、「参禅は須らく祖師の関を透るべし。妙悟は心路を窮めて絶せんことを要す。祖関透らず、心路絶せずんば、尽く是れ依草附木の精霊ならん。且らく道え、如何が是れ祖師の関。只だ者の一箇の無の字、乃ち宗門の一関なり。遂に之を目けて禅宗無門関と曰う。透得過する者は、但だ親しく趙州に見ゆるのみに非ず、便ち歴代の祖師と手を把りて共に行き、眉毛厮い結びて同一眼に見、同一耳に聞くべし。豈に慶快ならざらんや。透関を要する底有ること莫しや。三百六十の骨節、八万四千の毫竅を将って、通身に箇の疑団を起こして、箇の無の字に参じ、昼夜に提撕せよ。虚無の会を作すこと莫れ。有無の会を作すこと莫れ。箇の熱鉄丸を呑了するが如くに相似て、吐けども又た吐き出ださず、従前の悪知悪覚を蕩尽し、久久に純熟して、自然に内外打成一片ならば、唖子の夢を得るが如く、只だ自知することを許す。驀然として打発せば、天を驚かし地を動じて、関将軍の大刀を奪い得て手に入るるが如く、仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し、生死岸頭に於いて大自在を得、六道四生の中に向かひて、遊戯三昧ならん。且らく作麼生か提撕せん。平生の気力を尽くして、箇の無の字を挙せよ。若し間断せずんば、はなはだ法燭の一点すれば、便ち著くるに似ん」。頌に曰く、「狗子の仏性、全提正令。纔かに有無に渉れば、喪身失命せん」。

この賛文からも分かる通り、本作は中国宋代の禅僧・無門慧開（一一八三～一二六〇）が編集した公案集『無門関』に拠っている。第一則「狗子仏性」を画面上部に記すにあたり、橋村は念入りに下書きを行っている。恐らく橋村のもとには、何らかの参考文献があったものと思われる（註7）。ただ橋村は、本来「晝夜提撕、莫作虚無會、莫作有無會」と記すべきところを、「莫作虚無會」（虚無の会を作すこと莫かれ）の一文を削除し、「晝夜提撕、莫作有無會」のみとしている。こういった事例は以下の作品においても散見されるものの、これらが橋村の作為的なものか、もしくは単なる誤記なのか、未だ判断できかねる部分である。

【作品二】（図9）

本作は紙本着色、内寸は七八・四×六〇・八cm。画面左上に濃墨で大胆に雲を描いている。木々の枝や葉が揺らいでいることから、風が強く吹いていると推測される。賛文の下には四階建ての建造物が描かれている。款記は「乙巳春日寫智道人」。

【賛文原文】

不是心佛

南泉和尚因僧問云還有不與人説／底法麼泉云有僧云如何是不與人説底法／泉云不是心不是佛不是物無門曰南泉／被者一問直得揣盡家私郎當不少

頌曰

叮嚀損君德無言眞有功／任從滄海変終不爲君通

【賛文訓読】

是れ、心、仏にあらず

南泉和尚、因みに僧問うて云く、「還って人の与めに説かざる底の法ありや」。泉云く、「有り」。僧云く、「如何なるか是れ人の与めに説かざる底の法」。泉云く、「不是心、不是仏、不是物」。無門曰く、「南泉、者の一問を被りて、直に得たり家私を揣尽し、郎当少なからざることを」。頌に曰く、「叮嚀は君德を損す、無言真に功有り。任従い滄海は変ずるとも、終に君が為に通ぜじ」。

【作品三】（図10）

本作は紙本着色、内寸は七八・九×六〇・四cm。幾重にも連なる枝のうえ、ひとりの老人が座禅を組んでいる。本公案にも登場する香厳であろうか。款記は「乙

巳春抄寫智道人」。

【賛文原文】

香厳上樹

香厳和尚云如人上樹口啣樹枝／手不攀枝脚不踏樹、下有人問／西來意不對即違他所問若對又／喪身失命正恁麼時作麼生／對無門曰縱有懸河之／辨惣用不著説得一大／藏教亦用不著若向者／裏對得著活却從前死／路頭死却從前活路頭／其或未然直待當來問彌／勒

頌曰

香厳眞杜撰悪毒無盡限／唖却衲僧口通身迸鬼眼

【賛文訓読】

香厳、樹に上る

香厳和尚云く、「人の樹に上るが如し。口に樹枝を啣み、手は枝を攀じず、脚は樹を踏まず。樹下に人有って西来の意を問わんに、対えずんば即ち他れの所問に違く、若し対えなば又喪身失命せん。正恁麼の時、作麼生か対えん」。無門曰く、「縦ひ県河の弁有るも、惣に用不著。一大蔵教を説き得るも、亦た用不著。若し者裏に向ひて対得著せば、従前の死路頭を活却し、従前の活路頭を死却せん。其れ或いは未だ然らざれば、直に当来を待ちて彌勒に問え」。頌に曰く、「香厳は真に杜撰。悪毒尽限無し。納僧の口を唖却して、通身に鬼眼を迸らしむ」。

【作品四】（図11）

本作は紙本着色、内寸は八〇・四×六二・三cm。ひとりの僧侶が、左手で猫を掴み、右手には鉈を持っている。右手を後ろに振りかぶり、猫を切ろうとしているかのようだ。款記は左下に残っており、「乙巳首春　智道人寫」。

【賛文原文】

南泉斬猫

南泉和尚因東西両堂／争猫兒泉乃提起云／大衆道得即救道／不得即斬却也衆／（無）對泉遂斬之晩趙州／外歸泉挙似州乃／脱履安頭上（而）出泉／云子若在即救得猫兒／無門曰且道趙州頂／草鞋意作麼生若向／者裏下得一轉語便見／南泉令不虚行其或／未然険

頌曰

趙州若在倒行此令／奪却刀子南泉乞命

【賛文訓読】

南泉、猫を斬る

南泉和尚、東西の両堂の猫児を争うに因んで、泉、乃ち提起して云く、「大衆、道ひ得ば即ち救わん。道ひ得ずんば即ち斬却せん」。衆、対無し。泉、遂に之を斬る。晩に趙州、外より帰る。泉、州に挙似す。州、乃ち履を脱ぎて頭上に安じて出ず。泉云く、「子、若し在らば即ち猫児を救ひ得たらん」。無門曰く、「且らく道え、趙州草鞋を頂く意作麼生。若し者裏に向ひて一転語を下し得ば、便ち南泉の令、虚りに行ぜざりしことを見ん。其れ或いは未だ然らずんば、険」。頌に曰く、「趙州若し在らば、倒に此の令を行ぜん。刀子を奪却して、南泉も命を乞わん」。

【作品五】（図12）

本作は紙本着色、内寸は七九・一×六〇・八cm。大きな赤い木魚の後ろで、独りの僧侶が座っている。足を崩し、目を閉じている。公案にも登場する仰山和尚であろうか。款記は「乙巳春抄智道人寫」。

【賛文原文】

三座説法

仰山和尚夢見往彌勒所安第三座／有一尊者白槌云今日當第三座／説法山乃起白槌云摩訶衍法／離四句絶百非諦聽、、無門曰且／道是説法不説法開口（即失閉口）又喪不開／不閉十萬八千

頌曰

白日青天夢中説夢／捏怪、、誑謾一衆

【賛文訓読】
三座の説法
仰山和尚、夢に弥勒の所に往いて、第三座に安ぜらるるを見る。一尊者有り、白槌して云く、「今日、第三座の説法に当たる」。山乃ち起ち白槌して云く、「摩訶衍の法、四句を離れ百非を絶す。諦聴、諦聴」。無門曰く、「且らく道え、是れ説法するか、説法せざるか。口を開けば即ち失し、口を閉ずれば又た喪す。開かず閉じざるも、十万八千」。頌に曰く、「白日青天、夢中に夢を説く。捏怪捏怪、一衆を誑謾す」。

【作品六】(図13)
本作は紙本着色、内寸は七九・七×六一・〇cm。画面右上から左にむかって、木の枝が端的な墨線によって描かれている。その枝から落ちたであろう葉が地面に散らばっている。ひとりの僧侶が、両手で箒をもち、その落葉を掃いている。款記は「乙巳春抄寫　智道人」。

【賛文原文】
平常是道
南泉因趙州（問）如何／是道泉云平／常心是道州云／還可趣向否泉／云擬向即乖州云／不擬爭知是道泉／云道不屬知不屬不智ゝ／是妄覚不智是無記若／眞達不擬之道猶如太虚／廓然洞豁豈可強是非也／州於言下頓悟無門曰南泉被趙州發問直得瓦解氷消分／疎不下趙州縦饒悟去更參三十年始得
頌曰
春有百花秋有月／夏有涼風冬有雪／若無閑事挂心頭／便是人間好時節

【賛文訓読】
平常、是れ、道
南泉、因みに趙州問う、「如何なるか、是れ、道」。泉云く、「平常心、是れ、道」。州云く、「還って趣向すべきや」。泉云く、「向かわんと擬すれば、即ち乖く」。州云く、「擬せざれば、争でか是れ道なることを知らん」。泉曰く、「道は知にも属せず、不知にも属せず。知は是れ妄覚、不知は是れ無記。若し真に不疑の道に達せば、猶お太虚の廓然として洞豁なるが如し。豈に強いて是非すべけんや」。州、言下に頓悟す。無門曰く、「南泉、趙州に発問せられて、直に得たり、瓦解氷消、分疎不下なることを。趙州、縦饒い悟り去るも、更に參ずること三十年にして始めて得ん」。頌に曰く、「春に百花有り、秋に月有り、夏に涼風有り、冬に雪有り。若し閑事の心頭に挂くる無くんば、便ち是れ人間の好時節」。

以上の賛文解釈より、今回紹介した六作品は、全て『無門関』の公案に拠った作品ということが分かる。そして、全てが昭和四十年（一九六五）に描かれていることも明らかとなった。全ての款記に「春」という単語が用いられていることや、作品の内寸や描法がほとんど変わらないことから、同じタイミングで制作された連作と推測される。

ここで想起されるのは、橋村生前の日本南画院展（昭和四十年）に出品され、その後第八回日展に橋村遺作として出品された《百丈野狐》である（註8）。今回の調査により、現在個人の方が所有する本作も発見することができたので、まず画面上に記された賛文を訓読とともに紹介しよう（図14）。

【賛文原文】
百丈野狐百丈和尚凡参次有一老人常隨衆聽法衆人退老人亦退忽一日／不退師遂問面前立者復是何人老人云諾某甲非人也於過去迦葉佛／時曾住此山因学人問大修行底人還落因果也無某甲對云不落因果／五百生墮野狐身今請和尚代一轉語貴脱野狐／遂問大修行底人還落因果也／無師云、不（昧因果老人於言下大悟作禮云某甲已脱野狐身住在山後）敢告和尚乞依亡僧事例／師令維那白槌告衆食後送亡僧／大衆言議一衆皆安涅槃堂又無／人病何故如是食後只見師領衆／至山後嵒下以杖挑出一死野狐乃依／火葬師至晚上堂挙前因縁黄蘗／便問古人錯祇對一轉語墮五百／生野狐身轉〻不錯合作箇／甚麼師云近前来與伊道黄蘗（遂）近前／與師一掌師拍手笑

云將謂胡鬚赤更／有赤鬚胡無門曰不落因果爲甚／墮野狐不昧因果為甚脱野狐／若向者裏著得一隻眼便知得／前百丈贏得風流五百生／頌云不落不昧兩采一賽／（不昧不落千錯萬錯）

【賛文訓読】

百丈野狐

百丈和尚、凡そ参の次で、一老人有り、常に衆に随ひて法を聴く。衆人退けば、老人も亦た退く。忽ち一日退かず。師、遂に問ふ。「面前に立つ者は復も是れ何人ぞ」。老人云く、「諾。某甲は非人なり。過去、迦葉仏の時に於いて、曾つて此の山に住す。因みに学人問ふ、『大修行底の人還って因果に落つるや也た無や』、某甲対へて云く、「因果に落ちず」。五百生、野狐身に墮す。今、請ふ、和尚一転語を代り、貴えに野狐を脱せしめよ」。遂に問ふ、「大修行底の人も還た因果に落ちるや也た無や」。師云く、「不昧因果」。老人言下に於いて大悟し、作礼して云く、「某甲、已に野狐身を脱し、山後に住在す。敢へて和尚に告ぐ、乞うらくは、亡僧の事例に依れ」。師、維那をして白槌して、衆に告げしむ、「食後に亡僧を送らん」と。大衆言議すらく、「一衆皆な安し、涅槃堂に又た人の病む無し。何が故ぞ是くの如くなる」と。食後に只だ師の衆を領して山後の巌下に至り、杖を以って一死野狐を挑出し、乃ち火葬に依らしむるを見る。師、晩に至りて上堂し、前の因縁を挙す。黄蘗便ち問ふ、「古人、錯りて一転語を祇対し、五百生野狐の身に墮す。転々錯らざれば、合に箇の甚麼にか作るべき」。師云く、「近前来、伊れが与めに道わん」。黄蘗、遂に近前して、師に一掌を与ふ。師、手を拍ちて笑ひて云く、「将に謂へり胡鬚赤と。更に赤鬚胡有り」。無門曰く、「不落因果、甚と為てか野狐に墮す。不昧因果、甚と為てか野狐を脱する。若し者裏に向ひて一隻眼を著得せば、便ち前百丈の風流五百生を贏ち得たることを知り得ん」。頌に曰く、「不落と不昧と、両采一賽なり。不昧と不落と、千錯万錯なり」。

本来は「無師云、不昧因果。老人於言下大悟。作禮云、某甲、已脱野狐身住在山後」と表記するところを「無師云不敢」とし、最後の「頌曰」の部分にいたっては「不昧不落千錯萬錯」の一文が欠如している。ただ『無門関』第二則「百丈野狐」に拠っていることは明白であろう。横長の色紙には、画面右手に目をやりつつ、ススキのなかを走る一匹の狐が描かれている。そして賛文の最後には「乙巳新春　智道人」と記され、画面右下には遊印として「庚寅生」の朱文方印が捺されている。このことから、本作も昭和四十年（一九六五）の春に制作されたことが分かる。橋村は四月十七日に亡くなるので、本作が橋村最晩年の作であることは間違いない。

なお今回ご寄託いただいたコレクションのなかには、本作の狐を想起させる一枚が残されている（№49、図15）。七六・二×九八・八cmという大きな紙の上に、丁寧な筆致で一匹の狐を描いている。狐の毛の一本一本も細かに表現されているが、狐の尾や両足、そして左太腿付近の欠損した様子も同時に示されている。現段階では橋村の実見した原図は明らかにできていないものの、何らかの作品の狐を模写しているのだろう。つまり晩年の橋村は、以前写しとった狐の構図や表現を再利用したうえで、そこに『無門関』の第二則「百丈野狐」を組合せ、《百丈野狐》という作品を生みだしたと考えられる。

ただ本作は、前述した六作品とは異なり、横長の色紙に描かれている。それ故にこの七作品を連作と捉えることは難しいかもしれないが、昭和四十年の橋村が『無門関』をもとにした大作に取り組んでいたことは間違いない。橋村の弟子である直原玉青（一九〇四～二〇〇五）が昭和四十年四月九日の日記に「（註：橋村が）黄檗山へ寄贈の無門関の絵の話をされ『そろ〳〵死ぬ用意しているのや』と、冗談を言って笑われた」(註9) と記した事実とも相違ない。

本稿で紹介した七点は、このような最晩年における橋村の関心とともに解釈されるべき作品といえよう。

五．おわりに

今回紹介したふたつの作品群は、未だ明らかになっていない画家の一面を解明することのできる貴重なコレクションと言える。仙挙コレクションには画家の代表作が含まれており、橋村コレクションには画家の秘蔵していた資料が多数含まれている。未だその画業が明らかになっていない画家であるがゆえに、その作品だけではなく、こういった資料も併せて考えていく必要があろう。

なお本稿をなすにあたり、ご所蔵者の皆様には様々な事柄をご教示いただいた。また作品整理作業にあたっては当館の青木朋子学芸員の協力を得た。末筆ながら御礼申し上げる。

【註】

（1）松本仙挙については、白井宏治「松本仙挙」（『伊予の画人』愛媛新聞社、一九八六）、「松本仙挙について」（『のむら史談』第八号、野村町史談会、一九九二）を参照した。

（2）「松本仙挙君」（倉野武夫『京都画壇フースヒー』新愛知新聞社京都支局、一九二六）。

（3）西予ＣＡＴＶが二〇二一年に製作した「わがまち西予野村町出身の画家 松本仙挙」は近年の研究成果のひとつである。https://www.youtube.com/watch?v=oacPZsPfgFw

（4）矢野橋村については、『矢野橋村名作選集』（清文堂出版、一九七五）、『「矢野橋村展」図録』（牧方市教育委員会、二〇〇二）、谷岡彩「矢野橋村の基礎研究：大正期の画業を中心に」（『フィロカリア』三十八号、二〇二一）などを参照した。

（5）№39《天地乾坤》は「知道人／五十一才」の款記より、昭和十五年（一九四〇）と推定した。ただ乾坤社を創立した際、橋村は朱肉による手形とともに「天地乾坤」と書き記しており、昭和十四年に乾坤社を創設した際の関係資料という可能性もある。直原玉青「三人の死」（『青玲社余技日本画展作品集』一九六五、マリア書房）参照。

（6）無門関については、加藤咄堂『碧巌録大講座』第十三～十五巻（一九四〇、平凡社）、西村恵信 訳注『無門関』（一九九四、岩波書店）、秋月龍珉『無門関を読む』（講談社学術文庫、二〇〇二）などを参照した。なお橋村によって記されていない部分については、橋村独自の解釈なのか明らかにできていないため、訓読の際には全文を記した。

（7）橋村が参照した無門関に関する書籍の同定は難しいものの、第五十七代黄檗宗管長をつとめた僧侶・村瀬玄妙（一九一三～八八）の影響が大きいと考えられる。村瀬玄妙『無門関（上）（下）』（一九六八～一九七一、浪速社）参照。

（8）《百丈野狐》は、橋村の遺作として様々な書籍において紹介されてきた。例えば『矢野橋村名作選集』（清文堂出版、一九七五）においてはカラー頁のなかで紹介されている。ただ、無門関と関係する作品として解説が施されていない点や『「矢野橋村展」図録』（牧方市教育委員会、二〇〇二）が刊行された段階では行方不明作品となっていた点などから、今回図版とともに紹介する。

（9）直原玉青「矢野先生の死」（『青玲社余技日本画展作品集』一九六五、マリア書房）。なお本書には玉青の描く《無門関十則》という作品も掲載されている。

【表１】松本仙挙関係寄託作品一覧　※作品名を［　］でくくっているものは、筆者がつけた仮タイトルである。

No	作品名	和暦	西暦	出品歴	素材技法	形態	内寸
1	静山	大正6年	1917年	第11回文展	絹本着色	軸装	216.1×92.3
2	雛鳥				絹本着色	軸装	140.9.×45.2
3	兜				絹本着色	軸装	123.5×35.8
4	［梅］				絹本墨画淡彩	軸装	117.6×33.0
5	水蓮図				絹本着色	軸装	126.9×35.8
6	松本輯一郎宛御礼状（11月9日）				紙本墨書着色	軸装	24.5×35.3
7	［無花果］	昭和3年	1928年		紙本着色	軸装	130.7×33.4
8	［月に桜］	大正7年	1918年		絹本着色	軸装	163.5×71.8
9	孔雀				絹本着色	軸装	144.0×51.3
10	秋	大正7年	1918年		絹本着色	軸装	174.1×71.7
11	武者	大正7年	1918年		絹本着色	軸装	162.4×71.7
12	桃	大正7年	1918年		絹本着色	軸装	201.4×70.0
13	清閑	大正15年	1926年		紙本着色	軸装	137.3×66.5
14	山の朝				絹本着色	軸装	230.7×100.3
15	静寂図	大正10年	1921年	第3回帝展	絹本着色	軸装	168.5×70.3
16	伍道の跡	大正13年	1924年	第5回帝展	紙本着色	額装	59.2×104.5

【表２】矢野橋村関係寄託作品一覧

No	作品名	和暦	西暦	出品歴	素材技法	形態	内寸
1	春閑				絹本着色	額装	44.3×53.0
2	［渓谷］				紙本墨画	色紙	38.8×50.8
3	暮色蒼々図	昭和3年	1928年	第9回帝展	紙本墨画淡彩	軸装	240.0×150.0
4	近藤尺天先生像	昭和3年	1928年		絹本着色	額装	216.4×109.4
5	不動窟	昭和26年	1951年	第7回日展	絹本着色	額装	167.6×124.0
6	田植え				紙本墨画	額装	68.2×71.7
7	月明（水光接天）	昭和18年	1943年	第6回新文展	紙本墨画	額装	85.7×115.9
8	［赤カブとツクシ］				紙本着色	額装	33.0×24.0
9	夏掛け				紙本着色	額装	27.0×24.0
10	［干し柿］				紙本墨画淡彩	額装	29.0×25.7
11	［バラ］				紙本着色	マクリ	28.8×25.5
12	松林				紙本墨画	マクリ	90.3×93.2
13	魚集図				絹本墨画淡彩	軸装	47.0×59.3
14	猿捕月図	明治43年	1910年		紙本墨画	軸装	136.6×33.2
15	ハイキング（渓間）			関展か	紙本着色	マクリ	87.7×93.1
16	高山彦九郎像				紙本墨画	マクリ	50.8×38.7
17	［旅僧］	昭和33年頃	1958年頃		紙本着色	マクリ	73.3×50.4
18	水墨山水				紙本墨画	マクリ	52.7×56.6
19	金魚鉢				紙本墨画	軸装	44.4×34.0
20	福壽海				紙本墨書	マクリ	31.7×56.3
21	閑不徹				紙本墨書	マクリ	25.9×65.7
22	佛子				紙本墨画	マクリ	134.5×33.6
23	雲高氣静				紙本墨書	マクリ	33.4×129.2
24	観音像				紙本墨画	マクリ	70.6×33.8
25	観音像　資料				紙、インク	マクリ	22.5×17.5
26	観音像　資料				紙本墨画	マクリ	118.3×36.2
27	全吾真				紙本墨書	マクリ	29.8×91.4

28	壽以山				紙本墨書	マクリ	29.5×94.8
29	趙州狗子	昭和40年	1965年		紙本着色	軸装	78.4×60.8
30	不是心佛	昭和40年	1965年		紙本着色	軸装	79.7×60.8
31	香厳上樹	昭和40年	1965年		紙本着色	軸装	78.9×60.4
32	南泉斬猫	昭和40年	1965年		紙本着色	軸装	80.4×62.3
33	三座説法	昭和40年	1965年		紙本着色	軸装	79.1×60.8
34	平常是道	昭和40年	1965年		紙本着色	軸装	79.7×61.0
35	蓮花小品	昭和10年	1935年		紙本着色	軸装	18.7×24.1
36	琵琶湖北岸 大崎所見				紙本墨書	マクリ	17.5×25.9
37	鬼六の大雅				紙本墨書	マクリ	26.2×38.7
38	乙女	昭和18年	1943年		紙本着色	マクリ	38.9×27.6
39	天地乾坤	昭和15年	1940年		紙本墨書	マクリ	63.5×18.4
40	四季行楽				紙本着色	マクリ	91.2×24.1
41	［鳥図］				紙本墨画	マクリ	75.1×33.3
42	松江市北堀町で見し小泉八雲の旧宅				紙本着色	マクリ	24.8×29.2
43	［ツバキ］				紙本墨画	マクリ	48.8×27.1
44	［コイノボリ］				紙本墨画	マクリ	33.8×45.2
45	［滝下絵］				紙、クレヨン	マクリ	27.9×23.0
46	［竹林下絵］				紙、クレヨン	マクリ	40.3×31.3
47	［風景下絵］				紙、クレヨン	マクリ	31.6×40.3
48	［雪窓下絵］				紙、墨、鉛筆、クレヨン	マクリ	31.5×33.5
49	［狐模写］				紙本着色	マクリ	76.2×98.8
50	［河童模写］				紙本着色	マクリ	78.9×38.3
51	岸竹堂蓮花池之図				紙本墨画淡彩	マクリ	100.5×65.4
52	王若水模写				紙本着色	マクリ	25.7×35.0
53	銭舜挙模写				紙本着色	マクリ	26.1×35.1
54	舜挙模写				紙本着色	マクリ	26.2×35.0
55	［トンボ模写］				紙本着色	マクリ	28.1×37.5
56	［琴図模写］				紙本着色	マクリ	25.9×35.2
57	［花図模写］				紙本墨画	マクリ	34.8×26.0
58	［梅図模写］				紙本墨画	マクリ	26.4×17.1
59	［カブ図］				紙本墨画	マクリ	26.9×36.8
60	［花図］				紙本墨画	マクリ	18.2×26.4
61	［バラ図］				紙、鉛筆	マクリ	26.6×18.5
62	［アジサイ図］				紙本墨画	マクリ	22.0×35.6
63	［狐嫁入り図］				紙本墨画	マクリ	107.9×33.1
64	［ツクシ図］				紙、鉛筆	マクリ	33.0×24.3
65	［梅図］				紙本墨画	マクリ	22.0×42.7
66	［万国旗図］				紙本着色	冊子	26.0×18.9
67	唐画花鳥人物				紙本着色	冊子	25.8×17.7
68	［探幽模写］				紙本着色	冊子	26.0×18.6
69	［臨模帖］				紙本着色	冊子	26.0×18.6
70	永松春洋［セミ色紙］				紙本墨画	色紙	21.0×18.0
71	［柳図］				紙本墨画	マクリ	23.4×17.6
72	矢野橋村旧蔵書籍等						

図１：松本仙挙《静山》当館寄託

図２：松本仙挙《静寂図》当館寄託

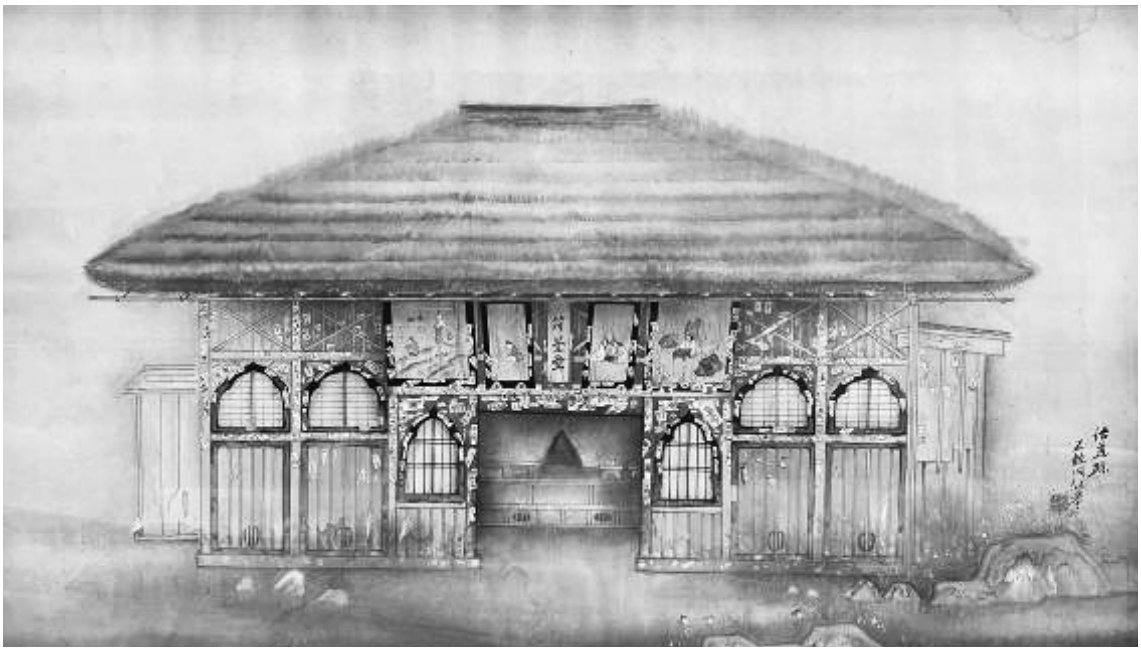

図３：松本仙挙《伍道の跡》当館寄託

図４：松本仙挙《水蓮図》
当館寄託

図５：松本仙挙《孔雀》
当館寄託

図６：松本仙挙《武者》
当館寄託

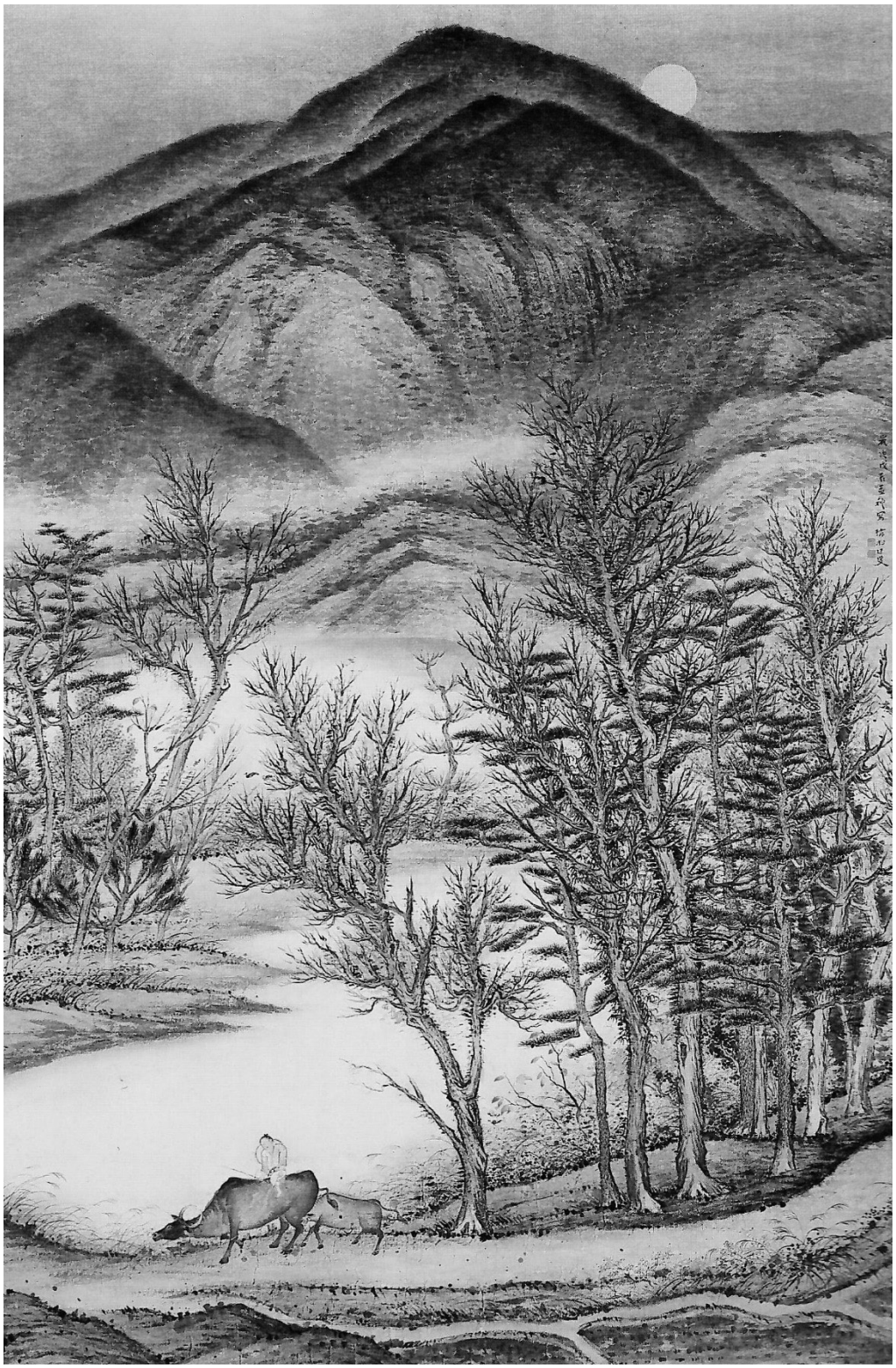

図７：矢野橋村《暮色蒼々》当館寄託

図８：矢野橋村《趙州狗子》当館寄託

図９：矢野橋村《不是心佛》当館寄託

図10：矢野橋村《香厳上樹》当館寄託

図11：矢野橋村《南泉斬猫》当館寄託

図12：矢野橋村《三座説法》当館寄託

図13：矢野橋村《平常是道》当館寄託

図14：矢野橋村《百丈野狐》個人蔵

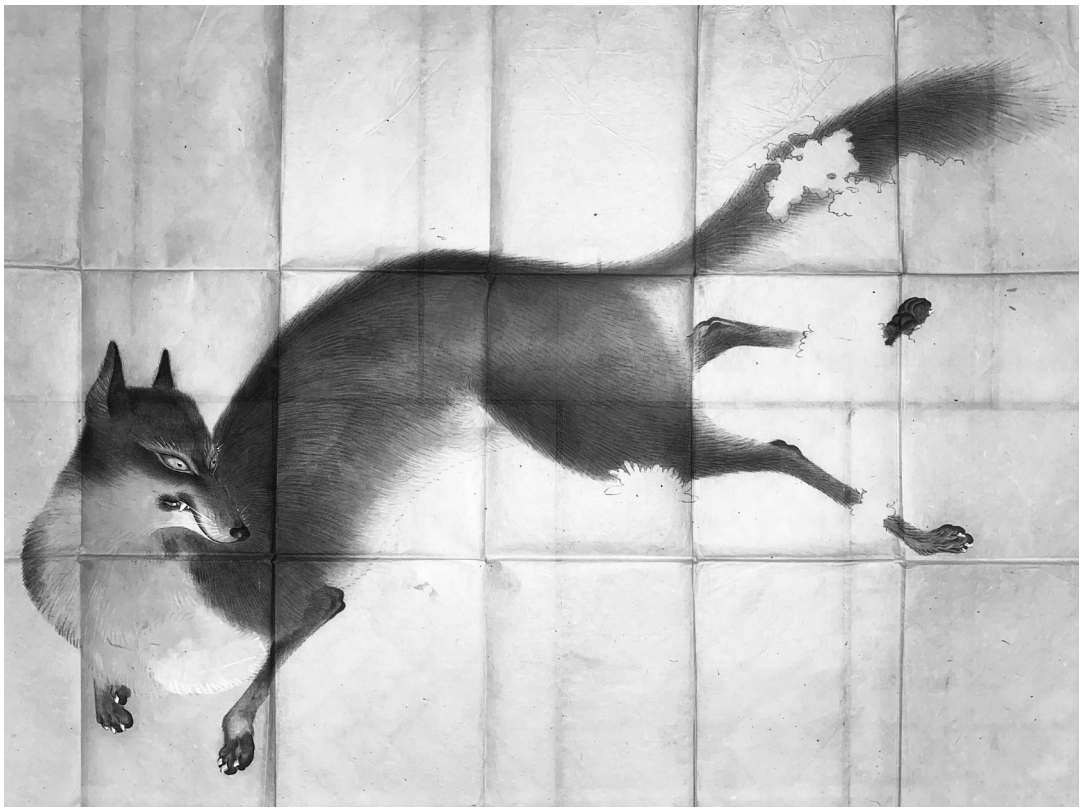

図15：矢野橋村《［狐模写］》当館寄託